E−4　住居における収納の研究　（第1報　；序説）

○三重大教育・勝田喜代子　大阪松蔭女大・一條宏子　大阪市大・上林

目的　住居における収納の問題は、大阪市大はじめ各住居学科、また若干の建築学科でも広く扱われてきた。個々の調査研究において、ある住居条件下のもとで定量的な成果もえられてきたが、個々の問題を、総体的に、また有機的に把握するに至っていない。特に我国においては住生活様式が未だ定着せず、公的施策住宅においても住生活空間と収納様態との間に甚しい矛盾が存在することを各研究において、鋭く指摘している。ここに本研究は収納の問題を基本的かつシステムの問題としてとらえ、我国の住宅、住生活の文化的向上に資することを目的とする。

収納基本論　住居における収納の定義を『住生活者が住宅内（あるいは一部住宅外を含む）におく生活物資の空間的秩序づけである』とする。したがって、住宅内部の空間的次元に応じて第1次収納（住宅空間がもつ収納），第1′収納（住宅内収納専用空間による収納），第2次収納（収納家具・装備　容器による収納），第3次収納（収納家具・装備・容器に収納される収納容具による収納）、以下第4次収納もありうる。このように、収納には空間的多重性がある。（図示）

関連諸要素　収納に関連する要素を下記のものとする（ただしそれらは生活者に主体をおき解析されねばならない――発表時詳説）。・被収納物の種類　・被収納物の使用の様態　・被収納物の動き　・被収納物と住生活様式　・被収納物の量的変動　・被収納のコントロール

結語　本研究は収納に関して生活とモノとの間に存する状況・原理・法則性を具体的に明らかにするための序説である。